

宋板太平寰宇記に關する異聞

日 比 野 丈 夫

我が宮内省圖書寮尊藏の宋本太平寰宇記が天下の孤本宇宙の珍寶であることは今更申すまでもない。明治

十七年楊守敬が、支那にも久しく闕けてゐた八卷の中、第百十三より百十八に至る六卷をこの中より發見し、古逸叢書に收めた結果、その價値は普く内外に知られるに至つた。支那の學者の中には羨望、懷疑の餘り、その補闕六卷を僞書なりと公言し、大真面目になつて根據を掲げ説をなす者も少くなかつた。しかし今日では最早や一點の疑を抱くものもない。近年北平圖書館は影印に附すべく全部の撮影を了つたといはれる。この宋本といへども、もとより殘本であつて目錄二卷の外完全なのは三十一卷、他は悉く斷簡片葉である。しかるにこれと相補ふと考へられる他の一部分が少くも文化初年の頃迄存在してゐたことを知る人は稀であらう。文化三年京都で刊行された藤原吉迪（又定迪）に作

る）の『睡餘小録』といふ隨筆に「宋板太平寰宇記」といふ一條がある。曰く、

寛政己未（十一年）の春、宋板の太平寰宇記の殘闕若干を獲たり。由來金澤文庫中の物なり。轉傳して洛北の一禪刹に久しくありしが、いかにして市中に落ちけん。半ばは屏風の下張にせしを、予辛うじて其半を得たりき。さて此寰宇記は他の宋板本と違ひてはなはだ大本なり。紙の全體横一尺六寸四分、豎一尺一寸四分、界の四方豎は七寸八分、横一尺三寸、片面十一界にして一行の字數は二十字なり。紙の質堅硬にして本邦の紙に異らず。ある人ひそかに疑ふ。往昔我邦より紙を渡して摺せしものならんかと。按ずるにこは本邦いにしへの印本、大内本、足利本などにてこそ此説はありけめ。宋板に此事を聞かず。是唐山別に一種の紙なるべし。大内本、足利本

活字本等の事は辨疑書目にも見えたり。又この寰宇記の表紙の厚さは凡そ二分ばかりにもあるべし。すべて淳熙、紹熙、慶元、寶祐等の記年あり反古紙以て是を合せ製す。是又賞すべし。按ずるに宋孝宗淳熙元年は高倉院承和四年にあたり。

と。恐らく心なき寺人の手によつて表具師に賣られ、半ば屏風の下張りに使はれてしまつた残部幾冊かを辛うじて買取つたのであらう。表紙の厚さ凡そ二分ばかりとあるのは不可解であるが、これに南宋の年號が記されてゐるに至つては珍中の珍といふべきではないか。次にその見本として

「在縣西十里。南接蒼梧。北通道側。山有古渡木實。」の一行を示してゐる。これを現行本について見るに、卷百六十一嶺南道賀州臨賀縣の幽山の記事である。古逸叢書の寰宇記補闕の楊守敬の跋(又日本訪書志卷六)に附する宋刊本原本存佚卷數によると、卷百六十一にはたゞ第七葉が存するのみとあるから、この一行は圖書寮本に存しないことはいふまでもない。

祕閣の宋本には立派な金澤文庫の印記があり、慶長七年徳川家康が江戸城内に富士見亭文庫を建立した時

金澤より移出されたものであるといふ來歴が傳へられてゐる。藤原吉迪によれば、彼の得た宋殘本もまた金澤文庫のものとなり、これが前者の殘闕であらうことは疑がない。しかも轉傳して洛北の一禪刹に久しく藏せられてゐたといへば、その一部分が金澤の地を離れたのは慶長以前のことであらうか。或は洛北の一禪刹とは一乗寺の圓光寺のことで、この寺が伏見にあつて、その境内に家康が學校を開いた當時已にその藏に歸し、大部分が江戸に持ち去られた後もなほ殘つてゐたものがあつたのかも知れない。

藤原吉迪については、平安の人、通稱河津周平、字は子彦、山白と號す。好古の癖あり、文化四年十月十七日歿す、など、『名人忌辰錄』にある外、今の所知る由がない。子孫などもをられることであらうか。今その殘簡は如何になつたであらう。いつかは、永遠にこの世界から佚し去つたと信じられてゐる第四卷(四庫本は卷百十三より十九に至る七卷のみを缺くといふ提要の説には疑を抱く。)や第百十九卷が何處か土藏の奥から現はれて、好事の士に隨喜の涙を流させる日が來ないともいへまい。